

## 若年層の性別役割分担意識に関する啓発と介入に関する一考察\*

下田 泰奈<sup>a</sup> 牛房 義明<sup>b</sup>

### 要約

本研究では、全国と比較して地方では性別役割分担意識が強い傾向にあるという「社会規範」を示すことで人々のジェンダー・ステレオタイプに関する意識が変容するか否か介入調査を行った。ジェンダー平等に関するアンコンシャス・バイアスと性別役割分担意識の解消を目的として制作した実証実験用ツール(啓発動画)を活用し、対象を①講義のみ(対照群)、②講義と動画視聴(介入群1)、③講義と動画視聴と参加者同士の対話(介入群2)に分けた場合、介入の有無によって、対象者の意識がどのように変化するか調査した。性別役割分担意識に関する10項目について、対象者が「思わない」と回答した割合について、差分の差分法を用いて対照群と介入群で比較したところ、2項目で介入効果が見られ、その影響は介入群1において特に顕著だった。介入を通して、「社会規範」を示すことによる人々の性別役割分担意識に関する変化について考察する。

JEL 分類番号： C02, I25

キーワード：アンコンシャス・バイアス, 性別役割分担意識, 差分の差分法, 介入調査

---

\* なお、本研究は、北九州市で実施した「ジェンダー平等意識変動調査」の一部であり、開示すべき利益相反関連事項はない。

<sup>a</sup> 下田 泰奈 Yasuna Shimoda 北九州市立大学大学院社会システム研究科  
y-shimoda@kitakyu-u.ac.jp

<sup>b</sup> 牛房 義明 Yoshiaki Ushifusa 北九州市立大学経済学部 ushifusa@kitakyu-u.ac.jp

## 1. イントロダクション

他の先進国と比較して日本のジェンダーギャップ指数は依然として低い水準にあり、2024年ランキングは146か国中118位で、特に政治・経済分野における格差が縮まらない現状がある。その背景にはさまざまな要因が指摘されているが、日本では特に、性別役割分担意識やジェンダーに基づくアンコンシャス・バイアスの存在が大きいと言われており、多様な社会の実現を阻む一因となっている。筆者らは今までに、令和3年度に内閣府男女共同参画局が実施した「性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」と同様の調査を九州圏内および北九州市の市民向けに実施し、全国と比較して地方ではより強い性別役割分担意識が存在すること、またその傾向は若い世代でも強いことを明らかにした。本研究では、その結果を元に性別役割分担意識に関する動画を制作し、介入群に対して、動画の視聴および対象者同士の対話を行った際、人々の意識に変化が表れるか否か調査した。

## 2. 目的

ジェンダー平等推進を阻害する一因と考えられるアンコンシャス・バイアスと性別役割分担意識の解消を目的として制作した実証実験用ツール（啓発動画）を活用し、北九州市の若年層の意識がどのように変化するかを調査し、啓発動画の有効性を明らかにする。

## 3. 方法

### 3.1. 調査対象

北九州市内のある高校の高校2年生3クラス計113名（男性：28名、女性：81名、その他・回答したくない：2名）を対象に実施した。個人情報保護および倫理的観点から、回答者には所属のクラスと出席番号の申告を依頼し、研究者含む調査実施関係者には個人が特定できない設計とした。また、アンケートへの回答は任意である点を伝え、回答をもって実施に同意したと見なした。

### 3.2. 調査手法

対象者に対し、事前と事後にWEBアンケート調査（全3回うち、事前アンケート1回、事後アンケート2回）を実施し、調査対象者を効果検証のベースラインとなる対照群と二種類の介入群に振り分けた。

対照群はアンコンシャス・バイアスと性別役割分担意識に関する講義のみを受講するグループ、2つの介入群のうち1つは、講義受講および動画視聴を行うグループ（以下、介入群1）、もう1つの介入グループは講義受講および動画視聴に加えて学生同士の話し合いを

実施するグループ（以下、介入群2）である。各グループの事前事後アンケートの実施日を以下表1で示す。

表1 調査実施日概要

	講義	動画視聴	学生同士の話し合い	事前アンケート	事後アンケート（1回目）	事後アンケート（2回目）
対照群	2024年2月27日	—	—	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年3月11日
介入群1	2024年2月27日	2024年2月27日	—	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年3月13日
介入群2	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年2月27日	2024年3月12日

性別役割分担意識を問う設問については、内閣府「令和3年度性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」および「令和4年度北九州市における性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する市民意識調査」を参照の上、特に北九州市の若年層（10～30代）において男女差の大きかった上位5項目、男女差の小さかった上位5項目をあわせた計10項目を採用し、事前アンケート、事後アンケート（1回目）、事後アンケート（2回目）において、各項目についてどの程度同意できるか、4段階で個人の意識を尋ねた。項目の詳細について、表2で示す。なお、事後アンケート（1回目）は各試行の直後に実施し、事後アンケート（2回目）は、講義の実施から二週間後の週に実施した。

表2 本調査で採用した性別役割分担意識に関する10項目

問1	男性が洗濯物を干すのはみっともない
問2	共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ
問3	男性であればいい大学を出て出世を目指すべきだ
問4	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ
問5	事務作業などの簡単な仕事は女性がするべきだ
問6	職場では、女性は男性のサポートにまわるべきだ
問7	女性は感情的になりやすい
問8	男性は気を遣う仕事やきめ細かな作業は向いていない
問9	男性は人前で泣くべきではない
問10	女性には女性らしい感性があるものだ

#### 4. 結果

##### 4.1. 介入効果の検証について

事前アンケート、事後アンケート（1回目）、事後アンケート（2回目）において性別役割分担意識に関する項目の介入効果について差分の差分法を行った。各項目について、どの程度同意できるか、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で個人の意識を尋ねた。「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を「思うと回答した割合」、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を「思わないと回答した割合」として二分類し、各項目について「思わないと回答した割合」の推移を検証した。ここでは、全10項目のうち、介入群1と介入群2の両

方において介入効果の見られた2項目について以下に示す。

表3 問8「男性は気を遣う仕事やきめ細かな作業は向いていない」  
に対する差分の差分法の結果

問8 男性は気を遣う仕事やきめ細かな作業は向いていない			
問8 (%)	対照群	介入群1	介入群2
事前	82.5	78.1	82.1
事後1	87.2	90.6	92.3
事後2	90.0	93.8	90.9
事後1-事前	4.7	12.5	10.3
事後2-事前	7.5	15.6	8.9
差の差(事後1-事前)		7.8	5.6
差の差(事後2-事前)		8.1	1.4

問8「男性は気を遣う仕事やきめ細かな作業は向いていない」に関する結果を、表3で示す。差分の差分法の結果は介入群1の事後アンケート(1回目)において7.8%、事後アンケート(2回目)において8.1%、介入群2の事後アンケート(1回目)において5.6%、事後アンケート(2回目)において1.4%となり介入効果が見られた。

表4 問10「女性には女性らしい感性があるものだ」  
に対する差分の差分法の結果

問10 女性には女性らしい感性があるものだ			
問10 (%)	対照群	介入群1	介入群2
事前	37.5	40.6	64.1
事後1	46.2	62.5	74.4
事後2	50.0	65.6	78.8
事後1-事前	8.7	21.9	10.3
事後2-事前	12.5	25.0	14.7
差の差(事後1-事前)		13.2	1.6
差の差(事後2-事前)		12.5	2.2

問10「女性には女性らしい感性があるものだ」に関する結果を、表4で示す。差分の差分法の結果は介入群1の事後アンケート(1回目)において13.2%、事後アンケート(2回目)において12.5%、介入群2の事後アンケート(1回目)において1.6%、事後アンケート(2回目)において2.2%となり介入効果が見られた。

#### 4.2. 介入による行動変容やアンコンシャス・バイアスに関する理解について

試行直後に実施した事後アンケート(1回目)において、「今回の授業を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか?」「『アンコンシャス・バイアス』について理解が深まりましたか?」と聞いた。結果を図1と図2で示す。

図1から、対照群の学生については7割以上が、介入群1と介入群2では8割以上の学

生が「強くそう思う」「そう思う」と回答した。また、図2から、各グループにおいて9割以上の学生がアンコンシャス・バイアスに関する理解が深まったと回答した。

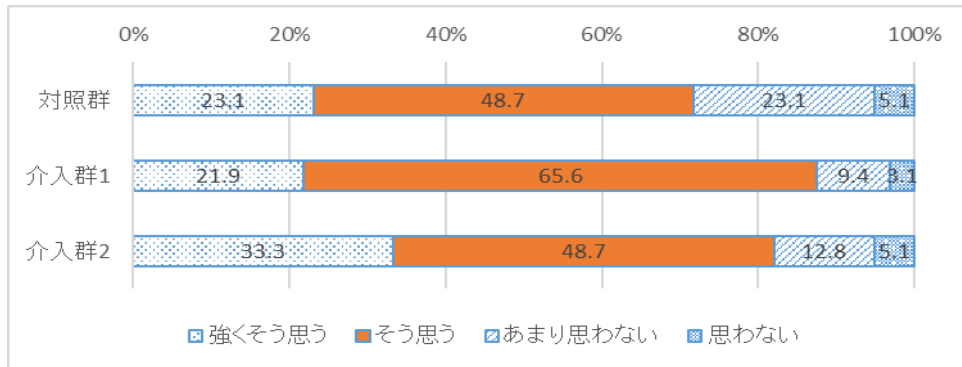


図1 「今回の授業を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問に対する回答状況

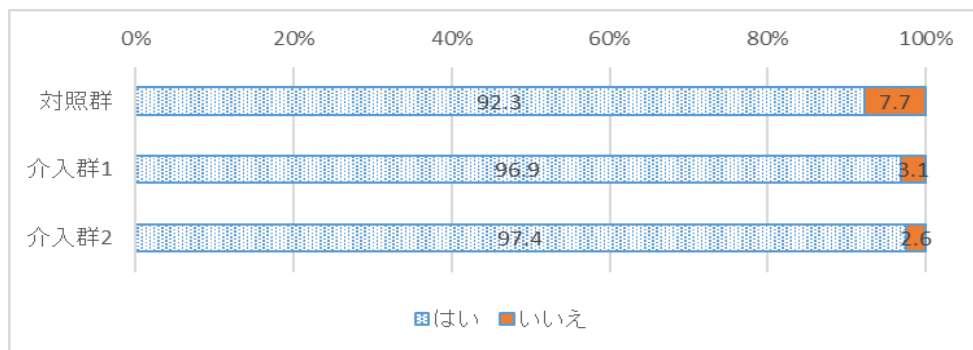


図2 『アンコンシャス・バイアス』について理解が深まりましたか？という問に対する回答状況

## 5. 考察

### 5.1. 介入効果の検証について

性別役割分担意識に関する10項目において、2項目で介入効果が見られた。講義受講に加えて動画の視聴を行った介入群1と、講義受講・動画視聴に加えて参加者同士の話し合いを実施した介入群2の結果を比較すると、事後アンケート（1回目）および事後アンケート（2回目）の両方において、介入群1の方が、介入群2よりも介入効果が高かった。

動画の中では、性別役割分担意識に関する過去の調査結果のうち、全国調査に比べて、北九州市では性別役割分担意識がより強い傾向にあることや、その傾向が若い世代でも顕著であることを伝えており、動画を視聴した対象者らが、自身の生活圏である北九州市の調査結果を見て、「北九州市における社会規範」のメッセージを受け取り、特に、介入群1においてその影響が濃く出た可能性が考えられる。一方、講義受講と動画視聴の後に、対象者同

士での対話の時間をもうけた介入群 2 では、介入群 1 よりも介入効果が弱く、本研究は同じ高校に所属する同学年の対象者同士で行ったことから、受講後の対話により、動画で得た「社会規範」のメッセージが薄れたと考えられる。今回、介入群では「啓発動画視聴」「参加者同士の対話」を実施したが、例えば、別の動画においてメッセージの伝え方を変える、など工夫することで対象者の意識に変化が生じるか、今後追加調査する必要があると考える。

## 5.2. 介入による行動変容やアンコンシャス・バイアスに関する理解について

図 1 から、対照群の学生よりも、介入群 1 と介入群 2 の学生の方が、「ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問いに対して「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、介入群 2 よりも介入群 1 において、その割合は高かった。よって、対象者の意識レベルにおいても、講義受講と啓発動画の視聴を行った介入群 1 のほうがその介入効果が高かったと考えられる。また、図 2 から、いずれのグループにおいても 9 割以上の学生が「今回の授業を経て、アンコンシャス・バイアスについて理解が深まった」と回答しており、事後アンケート（1 回目）を行った、試行直後の段階においては、対象者の意識の変容や理解が促進されたと考えられる。

## 引用文献

- 下田泰奈, 牛房義明, 2023. 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) の意識調査—全国調査と九州圏内調査の比較分析からの一考察—. 北九州市立大学経済学部 Working Paper Series.  
<https://www.kitakyu-u.ac.jp/economy/study/wps.html>
- イリス・ボネット, 2018. ワークデザイン行動経済学でジェンダー格差を克服する. NTT 出版, 日本.
- 北九州市, 2022. 令和 4 年度 北九州市における性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する市民意識調査.  
<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/contents/12001200.html>
- 北九州市, 2024. 北九州市における性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) 啓発動画.  
<https://www.youtube.com/watch?v=xwy1H1UAOWY&feature=youtu.be>
- 内閣府男女共同参画局, 2021. 令和 3 年度 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究.  
[https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu\\_r03.html](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html)